

福井県医師会

だより

第605号 平成23年(2011)11月



新潟県・瓢湖の水鳥

坂井地区 西野 慎吾

表紙写真説明：新潟県・瓢湖の水鳥

坂井地区 西野 慎吾

平成17年、生活環境委員会最後(町村合併の前年)の研修旅行(2年に1度)は、三国町の大堤、小堤の渡り鳥の観測、水質調査に活躍しているS氏の提案で氏の関係の深い新潟の瓢湖、福島潟を訪れる事になりました。写真は瓢湖の渡り鳥(水鳥)です。瓢湖では餌付けを行っています。

醫 縫 録

福井県外科医会と 乳がん撲滅への取り組み



福井県外科医会会長 笠原善郎

この度、今年の6月、福井県外科医会総会において会長を拝命いたしました笠原善郎と申します。年齢、実績、知識、技術、どの点においても分不相応な会長就任であり、諸先輩方に何も申し上げる立場ではございませんが、これまで活動してきた外科医会の活動と乳がん撲滅への取り組みについて述べさせていただきます。

昭和58年金沢大学卒業し医師免許を取得し、すぐ金沢大学第一外科(岩喬教授)に入局し、当時の大外科制のもと、心臓血管、肺、消化器、一般外科と様々な分野を研修しました。そして平成2年より、済生会病院に勤務し現在に至っています。福井に帰って20年余になりますが、はじめは消化器中心に腹部内臓すべてにわたる手術、患者を担当し、日々診療にあたっていました。平成14年頃よりは乳がん患者で手いっぱいとなり、平成16年以降は乳癌専門として診療に携わっています。

乳がんは他の消化器がんや呼吸器疾患と違って、内科領域の先生方が診断等に関与することがまずない特殊な分野であり、もっぱら外科医会の乳癌部会が福井県の乳癌検診、診療に携わってきました。私が金大第一外科に勤務していたころの外科病棟はがんといえば胃がんと肺がん患者ばかりで乳がん患者はごくまれでマイナーな分野でした。時代が変わり、食生活が西洋化し、罹患率では女性のがんの第1位、年間約50,000人が罹患し(一生のうちで8人に1人が乳がんになる)、12,000人が死亡するというのが現状で、女性のがんでは至急の医療施策が必要とされる癌腫になっています。

乳がんの社会的問題は罹患年齢が40代にピークを持つことです。勤勉な40代の福井の女性は、家庭では母親としてまた妻として尽くし、社会では中間管理職として働き、更に年寄りの介護まで受け持つという家庭的、社会的、地域的に重要な立場にあります。このような立場の女性が病に倒れ、時には再発転移でなくなれる場面は、夫が涙をこらえ、小学生の子供が目を腫らし、母親(おばあちゃん)が「こんな体に産んでしまった私が悪い」という自責の念で声を上げて泣いている、というような本当にいたたまれない状況で、これまで何度となく悲しく辛い思いをしました。

福井県外科医会では乳がん対策としてこれまで

諸先輩方に構築していただいた触診による検診システムを発展させ、2002年のマンモグラフィ検診導入を行い、福井県健康増進課や財団法人福井県健康管理協会との密接な連携のもと厳しい精度管理を行いながら乳がん検診への取り組みを続けてきました。しかし21年度市町村検診における乳癌検診受診率は22.4%にとどまり、がん対策基本法におけるがん対策推進計画の目標値50%にはまだまだ遠く及ばないのが現状です。受診率向上への取り組みが必須です。これには21年度から行われた無料クーポン配布とともに、23年度より開始された県下統一の5大がん個別検診システムが非常に重要と考えています。働き盛りの40代女性には、集団バス検診よりも施設による個別検診のほうがはるかにアクセスが良く、受診率向上に大きな力になると考えています。

今後、ピンクリボン運動や市民公開講座などの啓蒙運動にも積極的に取り組み、多くの方々がマンモグラフィ検診を受け、少しでも福井県の乳癌で亡くなる方が減るように、悲しい思いをすることがないように努力まい進したいと考えております。

乳がんについてのみ述べてきましたが、他の分野とも積極的に連携し、外科医会を盛り上げたいと考えています。自分は非常にいい時代に外科医としてのキャリアを積み重ねてもらいました。大外科で心、肺、消化器、乳腺、末梢血管とすべての分野を経験できたことと、腹腔鏡下手術などの新しい技術の変遷の渦の中にも飲み込まれ、否応なしに修練を積んできたことです。さすがに細分化された最新の手術や治療法に関しては学識不足ですが、乳腺以外の分野の活動に関しても薄学ながら皆様のお力添えを得て、積極的に取り組む所存です。外科医会として外科そのものの魅力を研修医や高校生、小中学生に伝えていくという松下前会長の意思も引き継いで活動していきたいと思っておりますので、医師会の先生方には今後とも重ねてご指導のほどお願い申し上げます。